

Title	遼室君主権の成立に関する一考察(四)
Author(s)	小川, 裕人
Citation	東洋史研究 (1938), 4(2): 109-136
Issue Date	1938-12-25
URL	http://dx.doi.org/10.14989/145644
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

遼室君主權の成立に關する一考察（四）

小 川 裕 人

十

叙上の傾向は、その後進展して、降戸或は俘掠等の被征服種族を以て組織した部族の數は増加し、遂に遼史（卷三三）營衛志下、部族下に見ゆるが如き狀態となつた。即ち太祖時代には五院・六院・乙室・品楮特・烏隗・涅刺・突呂不・突舉等の契丹人より成る九部族の他に被征服種族を以て組織した數多の部族があつたやうである。即ち奚の降戸より成る奚王府五部、奚の俘戸より成る迭剌迭達・乙室奧隗・楮特奧隗の三部、室韋の降戸を以て組織した突呂不室韋・涅刺拏古の二部、達魯斡部俘戸を以てした品達魯斡部、于骨里戸を以てした烏古涅刺・圖魯の二部がある。これ等部族の組織が神冊六年頃には一通り完成したことは營衛志の記事を一讀して察せられるところである。又遼史（卷六一）刑法志には

神冊六年克定諸夷、上謂侍臣曰、凡國家庶務鉅細各殊、若憲度不明則何以爲治、羣下亦何由知禁、乃詔大臣定治契丹及諸夷之法。

とある。契丹人と同等に被征服種族なる諸夷をも治する法律の制定されたのが、神冊六年である。從來等しく被征服種族として漢人と同じく律意を推析して論決された新附諸夷がこゝに至つて征服種族なる契丹人と法律上同

等の待遇を受けることゝなつたのである。これ等諸夷を以て組織した部族の制度がこの當時確立されたとする必要しも不都合ではなからう。而してこれ等の部族は降戸或は俘戸を以て組織されて居たことは前述の如くである。北族の未開な遊牧社會に於いては、その居住せる土地より引き割いて連れ來られた俘掠は、多く奴隸或は部曲として、不生産的な雜役に、或は生産的な牧畜その他技術的な勞役に從事せしめられ、その土地に居住したまゝに置かれる降戸は、屬民として征服種族の征壓の下に重い貢納の義務を負はされ、何れも征服種族と不平等な地位に置かれるのが常である。然るに遼國に於いては前述の如く多くの被征服種族が形式的にもせよ法律上契丹民族部と對等な地位を以て成立したのは大いに注意すべきことである。この現象は滿洲史に於いては遼代以後の國家に於いて始めて見られる現象で、渤海時代には未だ斯くの如き組織を見るには至らなかつたやうである。類聚國史(卷一九三)所載の我が在唐憎永忠の手紙に渤海國の事情を傳へて

處々有村里、皆靺鞨部落、其百姓靺鞨多土人少、皆以土人爲村長、大村曰都督次曰刺史、其下百姓皆曰首領とある。渤海國の支配階級たる土人即ち渤海人と被支配階級たる百姓即ち一般靺鞨人とは、種族的に相違のあることはこれによつて知られるであらう。因てこの國では征服種族と被征服種族とは、原則として階級を異にして居たと認むべきであらう。高句麗國も末期に至るまで、大體に於いて支配階級は被征服種族の混入はあつても、主として征服種族なる高句麗族を本體としたと推せられる。(これに就いては稿を改めて論ずるであらう。)

前述の如き遼に於ける被征服民の地位の向上や異種族諸部編成の組織は阿保機の初頃から始つて神冊六年頃に一先づ成立したとすれば、これは前節に於いて述べた如き契丹民族に對する遼室制壓の徹底、その君主權の強化と相表裏して進行して來た現象の如くである。

この遼室君主權の強化は、その高級官吏任命の事情よりも窺はれる。既に一言せる如く北府宰相は諸部大人誘殺直後の太祖五年に外戚にして功の多かりし蕭敵魯がこれに任ぜられたが、その死後は弟の阿古只がこれを承けて居る。迭剌部夷离堇は諸弟の亂が平定して、論功行賞の行はれんとする時、阿保機麾下に於いて第一の人物である曷魯をこれに任じ、その死後は弟靦烈がその後を襲つた。南府宰相は神冊六年にこの府所屬の諸部の名族の手より宗室に歸したことは既述の如くである。然るにその翌天贊元年十月のこととして

甲子以蕭霞的爲北府宰相、分迭剌部爲二院、斜涅赤爲北院夷离堇、綰思爲南院夷离堇、詔分北大濃兀爲二部、立兩節度使以統之、

とある。迭剌部が二分され北大濃兀部が析かれた天贊元年十月に北府宰相蕭阿古只や迭剌部夷离堇靦烈が在世中なるに拘らず罷めて前者には蕭霞的、迭剌部の分部なる北院には斜涅赤、南院には綰思が、その夷离堇に任ぜられて居る。霞的は他に所見なければその出身を明らかにし難いが蓋し早くより阿保機帳下に屬したその親兵の出であらう。斜涅赤が六院部の出で阿保機の親兵の一人なることは既述の如くであるが綰思は耶律休哥傳（卷八三）に字遜寧、祖釋魯隋國王、父綰思南院夷离堇とあるから、彼は釋魯の孫即ち世里氏の出身である。斯く見來れば契丹の最高官吏なる南北府宰相も迭剌部（北南院）夷离堇も次第に所謂名族の手から阿保機の親兵の出身者や宗室の手に歸して來たことが窺はれる。又その終身制も次第に減じて官吏的性質が濃厚となつて來た跡が辿られる。斯くの如きは遼室君主權の強大化の過程と相應するもので、それが大體天贊元年頃に至つて一段落したことが認められる。而してこれが異種族諸部の組織の成立した神冊六年の翌年のことであるところに特に注意される。

又この天贊元年には阿保機は中原國家の封冊なくして帝號を稱し、中原國家と對等な國家としての自覺を表明

した。これは北方民族の歴史に於いて曾て見ざるところで、金・元・清等の先驅をなすものとして注意すべきである。契丹に於ける右の如き現象に關聯して注意されるのは、高句麗國の國家組織の變遷である。廣開土王より長壽王時代に於ける征服領域の擴大、殊に平壤遷都に伴ふ樂浪・帶方郡の漢人の包含等によつて高句麗の王權は著しく伸張し、從來の支配階級に於ける氏族的要素は遙かに稀薄となり、地方征服地域に於ける支配も、王の命の下に行はれ、各部族の排他的支配は消失して、貴族も王命によつて地方行政の任に當つて居る。然し斯くの如き王權の擴大にもかゝらず、君主權は未だ絶對的なものではなく、貴族階級の諸勢力は豪族的存在として多分に王の國家統治權を制限して居るのが認められる。舊唐書高句麗傳には、

其官大者號大對盧、比一品、總知國事、三年一代、若稱職者、不拘年限、交替之日、或不相祇服、皆勒兵相攻、勝者爲之、其王但閉宮自守、不能制禦

とある。國事を總知する大對盧の官職が貴族勢力の左右するところとなつて居たやうである。渤海に於いても王權の可成りな發達は認められるが、尙王族以外に世襲貴族が相當の勢力を有して居たことは想像される。(これに就いては他の機會に論證する。)

一般に被征服領域の擴大は君主權強化の主要なる原因と考へられるから遼室の契丹名族に對する制壓は被征服民の數の増大と地位の向上とにその原因が求められるが如くである。然れども單なる被征服民の數の増大は高句麗や渤海に於いても既に明らかに認められる現象である。然しこゝに問題とする遼國に於いては、その包含された異種族が單に北族のみならず漢人をその主要なる分子とするに至つたことが注意される。勿論高句麗や渤海に於いてもその政治上經濟上の貢獻者として或は文化的奉仕者として漢人の要素はあつたが、然しその漢人の數と

質とに於いて遼に於けるものと同日に論ずることは出来ぬ。

十一

次に遼初に於いて漢人の成した歴史的使命に就いて考察する。

遼室君主權の成立過程に於いて、その特徴あらしめた最初の事件なる諸部大人の誘殺に際して、漢人が重要な役割を演じたことは既述の如くである。更に冊府元龜(卷一〇〇)彊盛のところを見ると

劉守光末年苛慘、軍士亡叛、皆入契丹、

とあり、五代史記(卷七二)四夷附錄にも

劉守光暴虐、幽涿之人多亡入契丹、

とあつて、遼太祖元年より七年正月まで幽州に鎮した劉守光の末年にその軍士或は幽州涿州の漢人が多く契丹に入つたことを傳へて居る。冊府元龜には右の記事に續いて、更に

洎周德威攻幽州、燕之軍民多爲所(契丹)寇掠、既得燕中人士、教之文法、由是漸盛。

とある。舊五代史(卷二八)唐莊宗紀によると周德威の幽州を攻めたのは天祐九年(遼史太祖六年)で、劉守光を囚へたのはその翌年である。而して阿保機は五年正月には奚を平定し、六年二月には劉守光を親征し、その四月には弟刺葛をして平州を攻めしめる等次第に幽州方面に迫つて居たのである。斯くの如き情勢に於いて、燕中人士が契丹に或は亡歸し或は寇掠されたのは蓋し事實と考へられる。斯る漢人の入り來つたことが契丹強盛の因を成したことも想像されるであらう。

契丹國志にも

初唐末、藩鎮驕橫、互相併呑隣藩、燕人軍士多亡歸契丹、契丹日益強大。

とある。唐末支那内地に於ける藩鎮の實力鬭争、統制的傾向、絶對君主權の發達等の機運の間に現實に身を處した漢人が多數契丹に歸して軍事上・政治上・文化上の指導者となつたとすれば、元來相互依存的才能主義的な契丹族の間にも統制的組織的意識が次第に濃厚となり、君主權強化の機運が起るのも當然のことである。諸部大人の誘殺やその後の諸部の名族に對する制壓は右の如き趨勢の中に促進せしめられたのである。

次にその後の状態を見ると、唐明宗實錄には

契丹強盛侵陵中國者、以得文進王郁之故、

とある。遼史卷一太祖紀によると盧文進の來降は神冊二年で、王郁の來投は神冊六年である。契丹の支那本地に積極的に働きかけたのはこの頃を轉機とするものゝやうである。斯くの如く漢人住地に積極的に働きかけたことは、高句麗や渤海にその例を見ないところである。高句麗は寧ろ朝鮮半島へ、渤海は東北滿洲へと發展したが、何れも文化程度の高い漢人住地への働きかけはあまり積極的ではなかつた。

これは彼等の住地が中國に遠隔であり低度文化民的な封鎖性を殘存して居たためでもあつたらうが彼等に實力の自覺がなかつたことが、その主なる理由であらう。彼等は中原國家に對して對立意識が稀薄で、寧ろ臣事してその封冊を受けて王を稱し文字の如きも獨自のものを創らず、漢字を用ひて居たやうである。然るに契丹は自己の文字を創り、中國の封冊なくしてこれと對等な帝號を稱し、漢人住地へも活潑に働きかけた。斯くの如きは契丹がその實力に自信を得て居たからで、而して彼等にその自信を得しめたものは漢人が多くその内的分子となつ

た事實と考へられる。

契丹の漢地との交渉は習爾時代から既に多少存した。然し欽徳時代のみならず、阿保機時代に入つても、その初は、それは寧ろ失敗の歴史で、遼史太祖紀に見えるが如く華やかなものではなかつたらしい。天復元年頃のことと推せられるが、阿保機の命を受けて奚部に使した曷魯の言として、

漢人殺我祖奚首、夷离堇(阿保機)怨次骨、日夜思報漢人、願力單弱使我求援於奚、傳矢以示信耳、とあり。(遼史卷七三、耶律曷魯傳)又唐餘錄には天祐年間のことを記したと思はれるものに、

劉仁恭鎮幽州、保機入寇、仁恭擒其妻兄述律阿鉢、由此十餘年不能犯塞

とある。阿保機が積極的に支那内地に働きかけたのは、韓延徽等の漢人の籌に従て、神冊元年七月以降西南方面の諸部を征し、餘威を以て山西省北部に侵入し、翌二年二月に晉の新州裨將盧文進の彼に投降して以後のことである。資治通鑑(卷二六九)には

初幽州北七百里有渝關……舊置八防禦軍、募土兵守之、田租皆供軍食、不入於蒔、幽州歲致繒纈以供戰士衣、每歲早穫、清野堅壁以待契丹、契丹至、輒閉壁不戰、俟其去選驍勇據隘邀之、契丹常失利走、土兵皆自爲田園力戰、有功則賜勳加賞、由是契丹不敢輕入寇、及周德威爲盧龍節度使、恃勇不修邊備、遂失渝關之險、契丹每芻牧於營平之間、

とある。これは支那人の報告なれば多少の誇張はあるにしても、契丹の漢地侵掠は早くとも周德威の盧龍節度使となつた乾化三年(遼史太祖七年)十二月頃まではあまり功を奏さなかつたものと思はれる。通鑑は更にこれに續

德威又忌幽州舊將有名者、往往殺之、吳王遣使、遺契丹主以猛火油、曰、攻城以此油燃火、焚樓櫓、敵以水沃之、火愈熾、契丹主大喜即選騎三萬、欲攻幽州、述律后晒之曰、豈有試油而攻一國乎、因指帳前樹、謂契丹主曰、此樹無皮可以生乎、契丹主曰、不可、述律后曰、幽州城亦猶是矣、吾但以三千騎、伏其旁、掠其四野、使城中無食、不過數年城自困矣、何必如此躁動輕舉、萬一不勝、爲中國笑、吾部落亦解體矣、契丹主乃止、

とある。阿保機は吳王から攻城に使用すべき猛火油を遣られて、南征を企てたが、皇后の諫によつてこれを中止した。これは遼史太祖九年（後梁貞明元年）のことと思はれるが當時は未だ契丹は積極的に幽州を攻め得る自信がなかつたのであらう。然るに神冊二年（貞明三年）二月に阿保機に降つた盧文進に就いて秦再思の洛中紀異には、

盧文進投契丹、說阿保機徵諸路甲馬、寇幽州、設圍攻之、莊宗召募救之、契丹退、

とあつて、盧文進が阿保機を説きて幽州を圍ましめたことが窺はれ、この時盧文進が攻城法を契丹人に教へたことも資治通鑑（卷二六九）貞明三年（遼神冊二年）三月の條に見えて居る。この幽州攻圍は遂に成功しなかつたが、これより契丹の漢地侵掠が非常に積極的になつたことは明らかに認められる。資治通鑑（卷二七一）龍德元年（神冊六年）十一月のところに

契丹主既許盧文進出兵、王郁又說之曰、鎮州美女如雲、金帛如山、天皇王速往、則皆已物也、不然爲晉王所有矣、契丹主以爲然、悉發所有之衆而南、述律后諫曰、吾有西樓羊馬之富、其樂不可勝窮也、何必勞師遠出、以乘危徼利乎、吾聞晉王用兵天下莫敵、設有危敗、悔之何及、契丹主不聽、十二月辛未攻幽州、李紹宏嬰城自守、契丹長驅而南圍涿州、旬日拔之、

とある。阿保機は王郁に勧誘されるや、北族的な保守性と封鎖性を多分に有する述律皇后がこれを諫止して、西樓羊馬の富に甘ぜしめんとしたが、遂にこれに應ぜず、南征を敢行した。同じく皇后の諫言があつたにもかゝらず、こゝに至つてはそれを無視して幽州を圍むに至つたのは、既にその實力に相當の自信を得て居たからであらう。而して阿保機をしてその自信を得しめたのは、國內叛亂の平定といふ内部的原因のみならず盧文進、王郁等の漢人をその分子として容れたからではなからうか。

然し當時は未だ支那内地に對し領土的野心を有するに至らず、これを有するに至つたのは太宗時代に入つてからのことのやうである。

即ち前掲資治通鑑龍德元年の記事に於いて、王郁が鎮州美女雲の如し、金帛山の如しと言つて阿保機に支那進出を勧めたことによつて察すると、當時の阿保機を始め契丹人の支那侵掠の主要動機は奴隸や財寶の獲得が主で未だ領土的欲望を有するに至つて居なかつたものの如くである。而して契丹人が支那に領土的欲望を有するに至つたと明らかに認められるのは、彼等が後述の如き徙民政策を止めたより後のことで、太宗天顯年間のことであらう然し唐明宗實錄には

莊宗未即位、盧文進王郁相繼入遼、皆驅率數州子女、爲虜南藩、教其織紵工作、中國所爲虜中悉備、契丹強盛云々、

とあつて、盧文進や王郁等は契丹に投歸してその軍事上の謀主となると共に、その部下の戰鬪員のみならず非戰鬪員なる數州の子女をも驅率して契丹内に居住せしめ、その織紵工作等の技藝を教へたために、支那的な工藝品が契丹内にも生産されるに至り、これ等漢人のために契丹が次第に強盛となつたことを記して居る。これに關聯

して考ふべきは州縣制の成立である。

十二

阿保機は天復二年秋七月に既に河東河北の俘掠を以て龍化州を築き神冊三年には皇都を築きその翌年には遼陽故城もこれを修築して漢民渤海戸を以てこれを滿したことが、遼史の太祖紀に見えて居る。然しこれによつて契丹一般の所謂州縣制の成立と見ることは出来ぬ。遼史地理志を見てもその州縣の神冊以前の設置と思はれるものは他に殆どない。首都臨潢府の府治のあつたところと推される臨潢縣の如きも

太祖天贊初南攻燕薊、以所俘人戶、散居潢水之北、縣臨潢水、故以名地、宜種植、

とあつて天贊元年に成立したもののやうである。臨潢府の東門の北の潞縣も、この年阿保機が薊州を破り潞縣の民を掠めてこれを置いたものである。その他の臨潢府所屬州縣も多くこの時以後に置かれたもののやうである。

遼史（卷七四）韓延徽傳には

太祖召與語合上意、立命參軍事、攻党項室韋、服諸部落、延徽之籌居多、乃請樹城郭、分市里、以居漢人之降者、又爲定配偶、教墾藝、以生養之、以故逃亡者少、

とある。契丹に於いて、城郭を樹て、市里を分ち、漢人の降者を置き、配偶を定め、墾藝を教へて生活の資を得せしめ、彼等を契丹の地に安住せしむるに至つたのは、韓延徽が與つて力あつたやうである。然るに延徽がこれを成したのは、右の記事によると阿保機が彼の籌を得て党項を攻伐してより後のことである。阿保機が党項を征伐したのは遼史（卷二）太祖紀によると神冊元年秋七月のことである。されば延徽が漢人の降者を州縣に安住せ

しむる策を獻じたのはこれより後のことである。

當時の契丹人の漢人に對する態度を見ると、神冊元年には党項等西南諸部を降した後支那に侵入して朔州を拔き十一月には蔚、新、武、嬀、儒五州を攻めて、萬四千七百餘級を斬首し、翌二年三月には幽州方面に侵入して幽州節度使周德威の率ゐる幽、并、鎮、定、魏五州の兵と新州の東に合戦して、大いにこれを破り、三萬餘級を斬首したと傳へられて居る（遼史太祖紀）。斯くの如く漢人を俘掠せずして、これを斬首して居るのは、當時契丹に於ける漢人消化力はあまり大でなく、従て未だ州縣制の確立して居なかつたことを意味するのであらう。然るに神冊六年十一月に至ると、檀、順、安、遠、三河、良鄉、望都、潞、滿城、遂城十餘城を略して其民を内地に徙し、その十二月癸丑には王郁が其衆を率ゐて來朝するや彼を養子とし、厚くこれを賞賚してその衆を潢水の南に徙し又己卯檀州に次した時、幽人が來襲するや、撃ちてこれを走らせ、その裨將を擒にし、詔して檀順二州の民を東平潘州に徙して居る。斯くの如く見來ると、神冊六年には既に大規模な漢人の徙民の行はれて居たことは全く疑ない。されば臨潢府の臨潢縣や潞縣がその翌天贊元年に成立したといふのも理由のないことなく、契丹に於ける漢人の徙民政策と州縣制はこの頃に至つて本格的になつたわけである。勿論これより以前にも、大量的な俘掠の行はれなかつたわけではない。神冊元年秋七月の條には阿保機の西南諸部征討のことを記して、

壬申親征突厥・吐渾・党項・小蕃・沙陀諸部、皆平之、俘其酋長及其戶萬五千六百、鎧甲兵仗器服九十餘萬、寶貨馬牛羊不可勝算。

とある。武器、衣服、寶貨、家畜等の財物の他に生口を大量的に俘掠したことが知られる。之より以前から奚、室韋、于骨里等に就いても同様のことが行はれたことは疑ない。然しこれ等の種族は漢人に比して文化の程度も

低く兵士や特殊技藝の奴隸として用ひられる他に、牧畜奴隸としての使役法も存したのであらう。

勿論漢人に就いても斯くの如きことはあつた。遼史(卷七一)淳欽皇后傳には

幽州劉守光、遣韓延徽求援、不拜、太祖怒留之使牧馬、后曰、守節不屈賢者也、宜禮用之、太祖乃召延徽與語、大悅以爲謀主、

とあつて、太祖の怒を受けて牧馬せしめられた韓延徽が、淳欽皇后の口添へによつて許されて阿保機の謀主となつたことが物語られて居る。當時(遼史太祖六年頃)の契丹には漢人の中に韓延徽を始め、康默記韓知古等の如く、阿保機の麾下に隸してその謀主となり、軍指揮官や文化的指導者に任ずる隸臣となれるものの他に、牧人として使役される奴隸の存したことはこれによつて察せられる。游牧民たる契丹人の生活に牧畜奴隸の必要は、彼等の政治的活動の範圍の擴大するに従て益多くなつたであらう。斯る目的のために游牧種族の俘掠は文化程度の高い農耕民たる漢人に比してより適當であつたであらう。神冊初頃西南諸部族が俘掠されたのに對し、漢人が斬首された理由はこゝに存するのであらう。斯く考へ來れば當時契丹に於いて漢人俘掠を消化する程度の低かりしは、これを農耕に使役することを知らざりしたためであつたとも言ひ得る。これ蓋し元來游牧民なる契丹人が自ら農業經營者となり得なかつたことに起因するのではあるまいか。

然るに前掲の韓延徽傳に見える如く、彼の建策に成る州縣制に於いては、漢人の降者を居らしめて配偶を定めたのみならず、これに墾藝をも教へたのである。斯くして漢人の降者が、一戸を構へて農耕をなすの制度が成立し、これがために逃亡する者が少くなつたといふ。契丹の漢人消化力はこゝに至つて増大したわけである。

遼史(卷五九)食貨志に

太祖平諸弟之亂、弭兵輕賦、專意於農、嘗以戶口滋繁、輒疎遠、分北大濃兀部爲二部、程樹藝、諸部效之、とある。北大濃兀部の二部に分たれたのは天贊元年十二月であるが、當時の契丹に於ける農耕に對する一般的顧慮が右の記事によつて窺はれる。これは漢人の農耕の進展と相應する現象と言へよう。

斯くの如き形勢の招來には漢人韓延徽等が與つて力があつたのである。契丹國志太祖紀にも

延徽始教契丹、建牙開府築城郭、立市里、以處漢人、使各有配偶、墾[○]藝[○]荒[○]田[○]、由是漢人各安生業、逃亡者益少、契丹咸服諸國有助焉、

とある。而してこれ等の州縣には賦税が課せられ、これが契丹國の收入に大きな財源となつたことは想像に難くない。遼史食貨志賦税のところには

自太祖任韓延徽、始制國用、

とある。漢人州縣を建策した韓延徽が、國用を制したと言へば、州縣に於ける税制も亦彼が定めたのであらう。されば契丹が州縣制を採用した動機には漢人の經濟的奉仕殊にその農耕勞働を利用せんとしたものゝあつたことが窺はれる。然し他面又この制度の採用によつて漢人の地位の向上したことも疑ない。遼史刑法志神冊六年の條には既掲の如き契丹及び諸夷を治するの法を定めた記事に續いて

漢人則斷以律令、仍置鍾院以達民冤

とある。從來奴隸的地位に置かれた一般漢人の俘掠もこゝに至つて法律上その地位が認められ、殊に鍾院といふ控訴機關さへ設けられたのは、彼等の地位の著しい向上を意味するのであらう。然し未だ彼等が遼國の自由民として契丹人と平等の資格を得たと速斷することは出來ぬ。漢人の中には既述の如く謀主として軍事的及び政治的

方面に於いて活躍せるものもあるから、是等は、相當に優遇されて居たことは疑ないが、一般の俘掠は奴隸としてこれとは甚だしく異なる境遇に置かれて居たことは想像に難くない。それがこゝに至つて法律上その地位が確認され、彼等はその本國に於けるが如く支那的な制度によつて治定されることゝなつたのである。然し遼の武力により、その意志に反して本地より引割かれて連れ來られ、遼室君主權を背景とする貴族に人的に所有されその制壓の下に、その領有地に強ひて結び付けられて居る點に於いて、未だ奴隸的色彩の濃厚なるものがある。元來遊牧民なる契丹人は自ら農耕を經營して奴隸を使用する才能を有たないから、漢人の智慧を借りて、漢人の經營に於いて農耕せしめ、その利入を計らうとする制度を採用した。これ等漢人を土地へ結び付けて居るものは國家權力である點に於いて、主として經濟力によつて土地に結び付いて居る農奴よりは一層非自由的である。然しこの漢人の奴隸的地位も遼室の漢人安住政策の下に次第に向上し、統和の初頃には一般漢人が法律上に於いても契丹人と同等の待遇を受けるに至つた。

右の如くして成立した漢人集團は行宮所屬の州縣^②や頭下州私城等となつたのであらうが、斯くの如き州縣を領有するものは皇室を初め當時の貴族であつたやうである。

低度文化民なる北方民族一般の例に漏れず、契丹民族も、その發展の初期に於いては、狩獵牧畜と共に戦争や略奪も亦主要なる生産方法に數へられる。その略奪も既に奴隸の使用を知れる彼等は物資の他に人間も亦その對象となつた。未だ俸給制度の定なき彼等の社會に於いては、略奪した物資や人間はその都度各功績によつて分與されたものの如くである。

遼史卷三七地理志一には

頭下軍州、皆諸王・外戚・大臣及諸部從征俘掠、或置生口、各團集、建州縣以居之、橫帳諸王・國舅・公主許創立州城、自餘不得建城郭、朝廷賜州縣額、其節度使朝廷命之、刺史以下皆本土部曲、充焉、官位九品之下、及井邑商賈之家、征稅各歸頭下、唯酒稅課納上京鹽鐵司、

とある。遼の國庫のみならず、貴族階級なる宗室・外戚及び大臣以下の官吏階級の經濟的基礎も亦その在來の牧畜の他に定着種族の俘掠を以て組織した封建的州縣及びこれに準すべきものにあつたことを知ることが出来る。これ等定着民の中に於いても、漢人が主要なる分子を成して居たことは略想像しても誤なからう。

遼の州縣には右の如き貴族の封建的私領の他に、所謂行宮所屬のものや、一般の州縣も存したことは言ふまでもない。而してそれは年を降るに従つてその數を増したことも多言を要しないところである。

遼國及びその貴族階級の經濟的基礎が彼等自身の經營による遊牧より漢人による農耕へ、北族的なものより支那的なものへ推移する、重要な一步がこゝに踏み出されたことが窺はれる。こゝに至つて遼國の封建的組織が支那的な形式に於いて成立せんとしたのである。從來彼等自ら及びその奴隸によつて行はれた牧畜のみでは、その政治的活動の進展と共に既に著しく膨脹した彼等の經濟は賄ひ得なくなり、こゝに農業經濟への移行が必然的に要求されて來たのである。然るに彼等は古くより遊牧をその主要形式として來た民族である。自ら經營者として、大規模な奴隸農業を爲すべき才能を有さない。又彼等の政治的發展はあまりに急激で彼等自ら農耕を修得して牧畜經濟より農耕經濟へ全體的に移行すべき時間を許容しない。契丹人の生産様式の自然的進展とその著しい政治的發展との間には多大なギャップがあつたことが認められる。契丹人の政治的活動は既に著しく進展して農業經濟とそれに相應した文化を要求して居るのにその生産様式の自然的進展は遊牧より農耕への移行を完全には

成し得なかつた。又彼等は蒙古地方の民族の如く西方と支那との中繼商業利得を得る特典も少かつた。このギャップを能く充し得てその政治的發展を成就せしめたのは漢人の文化(制度をも含めて)とその農業經濟であつたのである。契丹人の政治的活動の發展過程に於いて漢人の指導の與つて力のあつたことは既述の如くである。北族のZinganaな生活力と勝れた才能に漢人の文化と經濟が結び付いたために異常なる政治的活動が現出したのである。然しその當初に於いてはそれ等の漢人は政治的文化的施設の謀主として、或はそれ等の率ゐる部下の軍事的又は技術的奉仕を主としたのである。こゝに至つて州縣制の成立したのは、契丹國の經濟に於いて、漢人の農耕經濟の擡頭したのを意味する。この州縣制度の成立に貢獻した韓延徽に關し、遼史食貨志は、太祖任韓延徽始制國用と記して、この當時漢人の税制を定めたらしい記載の存することから見ても、當時既に遼國が漢人の農業經濟に依存しつゝあつたことが想像されよう。

斯く遼國が漢人の農業經濟に直接依存するに至つたことは、單に遼國の歴史に於いてのみならず、滿洲史に於ける劃期的な事實で、これより以前の高句麗に於いても渤海に於いても、漢人的分子の存在せるは明らかに認められるが、未だ國家の經濟的基礎が漢人の農業經濟的奉仕に置かれたのは遼國が初である。

更に文化の方面を一瞥する。

神冊五年正月には漢人の教により漢字の格を増損して契丹大字を作つた。又韓知古傳には

神冊初、遙授彰武軍節度使、久之信任益篤、總知漢兒司事、兼主諸國禮儀、時儀法疏濶、知古援據古典、參酌國俗、與漢儀雜就之、使國人易知而行、

とあり、韓知古等による儀法の成定もこの當時のことである。こゝに古典に援據して國俗の他に漢儀を交へたと

ころに注意を要する。

又太祖紀によると神冊六年五月には法律の制定と共に班爵をも正した。又同月の條には

丙申詔畫前代直臣像、爲招諫圖、及詔長吏四孟月詢民利病、

とある。招諫圖を作り、民の利病を詢はしめんとしたのは、名君主としての漢的教養を示さんと企圖した態度と言へよう。

遼史卷七二義宗傳には

神冊元年春立(義宗)爲皇太子、時太祖問侍臣曰、受命之君、當事天敬神、有大功德者、朕欲祀之、何先、皆以佛對、太祖曰、佛非中國教、倍曰、孔子大聖、萬世所尊、宜先、太祖大悅、卽建孔子廟、詔皇太子春秋釋奠、とある。既に皇太子制度が採用され、皇太子義宗(倍)の如きは可成り支那的な學問をして居たことが窺はれるが、阿保機自身も天に事へ神(祖先神)を敬するの他に孔子を尊んで支那的な教養を修めんとして居た態度が認められる。神冊六年に招諫圖を作らしめた如きもこの傾向の現れであらう

以上の如く神冊五六年頃の阿保機の施政には、漢的色彩探が著しく濃厚となつて來て居ることが認められる。斯くの如き情勢の中に阿保機が支那風に帝號を稱するに至つたのは蓋し當然と言へよう。舊五代史契丹傳には

天祐末、案巴堅(阿保機)、乃自稱皇帝、署中國官號、其俗舊隨畜牧、素無邑屋、得燕人所教、乃爲城郭宮室之制于漠北、…………其國人號案巴堅爲天皇王

とある。阿保機が帝號を稱したのは天祐末(十九)年卽ち後梁龍德二年、遼天贊元年と見ることの妥當なるは余が曾てこれを主張したところである。この卽位の後も、契丹人は阿保機を皇帝と呼ばずに太宗初年頃まで實際には

從來の如く天皇帝と稱して居た點から見ると、この時の帝號は漢人制御上の必要から自號したもので、當時に於ける漢人の地位の向上と、その數の増大せる現象に適應した處爲であつたのであらう。この中原國家の封冊なくして皇帝位に即いたことは、北方民族の歴史に於いて劃期的なことで、中原國家の封冊といふ傳統それ自身には價值を認めず、實力によつて既に中原國家と對等なる地位を獲たといふ自覺を表現せるものと言へよう。而してこの自覺を得しめたものは漢人を多くその内的分子とした事實と相應するものと考へられる。

十三

天贊元年阿保機が帝號を稱した頃は、遼室の權力が契丹諸部に徹底して、中央集權の實が擧つたのみならず、支那的な意味に於ける國家的自覺が明確となつて來たことも認めねばならぬ。然し未だ帝位の繼承も北族的な英雄主義的傾向と、宗室政治的性質から脱却しては居なかつた。

諸第の亂も平定して契丹諸部に對する遼室の制壓にも目鼻がついた神冊元年、阿保機は支那的な皇太子制度を採用し、その長子倍を立て、皇太子としたが、實際に帝位を繼承したものは次子太宗で、母述律太后の意の傾いた上にその軍隊指揮者としての才能と功績が認められたからである。太宗の時にその息があつたにもかゝらず弟李胡が皇太弟となつたが、太宗の死後倍の長子世宗が嗣いだ。これは太宗の後管討伐に従軍し將士の間に衆望があつたからであらう。斯くの如く帝位の繼承にその才能が顧慮される點に於いて英雄主義的であり、繼承者が宗室の中から出づる點に於いて宗室政治的である。これ等北族的意識の殘存が支那的な皇太子制度の實施力を奪つて居たのである。

斯くの如き情勢に於いては帝位の繼承を運つて宗室間の内争の起るのは必然である。それは支那的組織化が完成して居ないからである。これは宗室政治の内的崩壊とも見られるであらう。

太祖より太宗への繼承は述律皇后の支持を得て事なきを得たが、世宗の襲位に際しては、述律氏の擁する李胡との間に將に大事が起らんとした。幸に賢臣耶律屋質等の善處を得て争亂に至らずに済んだ。世宗の在世中には太宗の子天德、述律太后の甥蕭翰、阿保機の弟寅底石の子劉哥・盆都等の謀反があり、後世宗は阿保機の弟安端の子察割の謀亂に倒れた。次に太宗の子穆宗が即位したが、劉哥・盆都の誅戮、世宗の弟婁國、太宗の子敵烈等の謀亂、李胡の子宛等の謀反、李胡の子喜隱の亂等が頻りに起つて居る。穆宗はその後に至つて近侍の兇刃に倒れた。これは穆宗のあまりに暴虐なりしためと言ひながら政治的背景が皆無とは言へないであらう。次に世宗の第二子景宗が擁立されたが、その次に嗣いだのは其の長子聖宗である。これより後は遼帝はその壽を全うし、その繼承も穩かに行はれ、長子相續法を原則とし、帝位の繼承は支那的に制度化されるに至つた。こゝに至つて遼の帝權はその軌道に登つたわけである。されば右の如き宗室内の争亂は、君主權が北族的宗室政治的なものより支那的な帝位絶對の組織的政治へ推移する一の摩擦と見ることも出来るであらう。而してこれは北族的な宗族崩壊の過程と相應するものではあるまいか。

更に詳細に考察するとこの間に於ける漢人の擡頭が、著しく目につく。遼に於ける漢人は太宗時代に於いて燕雲十六州の領有、汴京占據等の事件を経て遙かにその數を増大し、その重要性の多くなるに従て制度等を初として漢的文化が益々多く採用されるに至つたことは言ふまでもない。就中南院(漢人)樞密院が設置されその樞密使として漢人が用ひられたことが注意される。漢人を治する獨立の機關が北族を治する北院と對立して設けられる

に至つたのである。これによつて漢人の重要視されるに至つたことが察知されるであらう。樞密使の官名は燕雲十六州領有當時よりその名が見えるが、太宗末年の汴京占據を経て世宗時代に入り、北族を治する北院樞密院の創置と共に實際に制度化されるに至つたものゝやうである。この樞密院に就いては津田^③左右吉博士の詳細なる研究を参照されたい。

こゝに於いて北院樞密院の創置に就いて考へると、これは曾て外戚や宗室等によつて占められて居た部族統治の最高機關なる北南府兩宰相の權力が、この樞密院に移つた事實を物語るのである。北院樞密使は世宗の擁立に功があり、且つその腹心として宿衛を總知して居た耶律安搏がこれに任ぜられたのを最初とする。(遼史卷七七耶律安搏傳)次に穆宗の時にこの官に就きし蕭護思に就いてはその傳(卷七八)に應歷初、遷左客省使、未幾拜御史大夫、時諸王多坐事繫獄、上以護思有才幹、詔窮治稱旨、改北院樞密使、仍命世預宰相選、とあり、景宗の時の蕭思溫に就いてはその傳(卷七八)に思溫與南院樞密使高勳飛龍使女里等立景宗、保寧初爲北院樞密使兼北府宰相、仍命世預其選、とあり、耶律賢適に就いては、その傳(卷七九)に景宗在藩邸、常與韓匡嗣女里等游言、或刺譏、賢適勸以宜早疎絶、由是穆宗終不見、疑賢適之力也、景宗立、以功加檢校太保、尋遙授寧江軍節度使、賜推忠協力功臣、時帝初踐阼、多疑諸王或萌非望、陰以賢適爲腹心、加特進同中書門下平章事、保寧二年秋、拜北院樞密使兼侍中賜保節功臣とある。北院樞密使となりし者は、當時の皇帝の擁立に功あり、或は早くよりこれに仕へ、腹心となれる者に限られて居たやうである。斯くその人物を重任せるは、宗室内の紛争と不離の關係にあつたことは、右の記事を一讀しても窺はれるところであらう。

この北院樞密使は、安搏・蕭護思・蕭思溫の任命までは繼續的でなかつたが、景宗の保寧元年蕭思溫が任命され

て北府宰相を兼ねて以後は、常置のものとなつたやうである。遼の帝權が正しく軌道に登つたのも景宗以後のこととなれば、それは北院樞密院の成立と重大關係があると見て大過なからう。而してこの間に於いて更に注意すべきは、漢人が北院樞密使になつたことであらう。保寧二年蕭思溫が殺され、耶律賢適がこれに繼いだが、幾何ならずして西北路招討使となり、これに代つて北院樞密使となつたのは、南京の人室昉であつたやうである。彼は聖宗紀統和元年正月の條に樞密使兼政事令室昉以年老請解兼職、詔不允とある如く聖宗時代に入つても非常に重要視された人物である。統和三年頃に至り、耶律斜軫がこれに代つたが、十七年斜軫が薨するや、再び漢人（景宗時代より南院樞密使となる）なる韓德讓が、知北院樞密使事を兼ねて、その實權を握つたやうである。斯くの如く漢人が契丹人をも治する北院樞密使となるに至つたことは明らかに漢人の進出を物語るものである。

斯くの如き漢人擡頭に好機會を與へたものは、前述の如き宗室間の勢力争ひである。この間に於いて漢人は皇位繼承に關係して、その勢力擴張の機會をつかんだ。世宗の即位後張延壽が樞密使を授けられたのは、翼載の功によるものであり（遼史卷七六趙延壽傳）蕭思溫や女里等と共に景宗の擁立に關係した高勳はその功により秦王に進められ、南院樞密使に補せられて居る。（卷八五高勳傳、蕭思溫傳）。又聖宗時代に南院樞密使、北府宰相、監修國史のみならず北院樞密使をも兼ね、耶律姓や德昌、隆運等の名を賜り、その廟は他に類なく諸宮の例に擬せられた韓德讓も亦景宗の顧名を受けて聖宗を立てた者である。

斯くの如く皇帝擁立にまで、漢人が關係するに至る情勢だつたので、官界に於ける彼等の進出にめざましいものゝあつたのも不思議はない。當時の最高官廳なる樞密院に於いて、漢人を治する南院のみならず、専ら北族を治し軍權をも掌握して居た北院の樞密使をも漢人の占むるところとなるに至つたのも自然の勢である。

又當時右の如き要路に在りし漢人が、同じく漢人を推さんとしたことは、工部侍郎李潛が罪を以て穆宗に殺されんとした時、當時南院樞密使なりし高勳が、これを救つて文學の才を薦したこと（遼史卷一〇三李潛傳）、統和九年當時北府宰相監修國史なりし室昉が、南院樞密使韓德讓を推薦して自分の官を兼ね代らしめんとしたこと（卷七九室昉傳）。同十年刑抱朴が韓德讓の薦によつて按察諸道守となつた（卷八〇刑抱朴傳）こと等によつても察せられる。高級官吏に於いて斯くの如き現象があつたとすれば、下級官吏にも漢人官吏の傳手によつてその地位を得た漢人の少くなかつたことが想像される。

政界に於ける漢人の進出は以上によつて大體窺はれるが、一般民衆に對する遼室の顧慮もこの時代に一進展したことが認められる。漢人民衆の利用とその統治に關する注意は太祖の神冊末年頃既に拂はれて居たことは既述の如くなるが太宗時代に入り燕雲十六州の領有により大量的に漢人をその治下を含むに至つてこれに對する顧慮は益必要視されるに至つたやうである。遼史卷四太宗紀會同八年九月の條に

壬寅次赤山、宴從臣、問軍國要務、對曰軍國之務、愛民爲本、民富則兵足、兵足則國強、上以爲然、

とあつて、強國の實を擧げる爲には民を富ましめる必要があるといふ經濟的理由から愛民政策の採るべきを認めて居たやうである。而して會同九年秋七月の條には

辛亥詔徵諸道兵、敢傷禾稼者、以軍法論、

とあり、又大同元年夏四月の條には晉討伐の時の記事に

乙丑濟黎陽渡、顧謂侍臣曰、朕此行有三失、縱兵掠芻粟一也、括民私財二也、不遽遣諸節度還鎮三也

とあつて、農民の生活愛護の精神の大いに表はれて居るのが認められる。又食貨志（卷五九）を見ると五京の戸丁

を籍して賦税を定めたのも太宗時代のことのやうである。

世宗・穆宗・景宗三代を経て聖宗時代に入つては戦時に於ける民生保護、勸農や凶災に於ける賑恤や税役の減免、括田の廢罷等愛民施政の事實が頻見する。斯の如き愛民政策の確立は矢張り主として漢人政治家の手によつて成されたのである。遼史卷七九室昉傳統和二年の條には

是時昉與韓德讓耶律斜軫相友善、同心輔政、整析蠹弊、知無不言、務在息民薄賦、以故法度修明、朝無異議、とあり、耶律隆運傳（卷八二）統和四年の條にも

與北府宰相室昉共執國政、上言、西州數被兵、加以歲饑、宜輕稅賦、以來流民、從之、

とあり、この他にも室昉や隆運（韓德讓）が民生保護の建言をしたことが見えて居る。室昉も韓德讓も共に景宗時代より樞密使として遼の國政の樞機に參與して來た人物であることは既述の如くである。これ等漢人の重任されたことは、他面漢民愛護の傾向の濃厚になつた事實と相應するものであらう。穆宗の時に一旦廢された漢人の機關たる鍾院^⑤が、景宗の時復活された（遼史卷六一刑法志上）事實からも、當時漢人の待遇が一般的に改善されたことが推される。聖宗時代の初に、法律上に於ける漢人契丹人間の差別待遇の徹廢された（刑法志上）のも、右の如き景宗時代に於ける推移の結果と言ふべきであらう。斯くして聖宗時代には前述の如く漢民保護の施政は頻りに行はれたが統和十二年十月には均稅法も制定されて居る。（遼史卷十三聖宗紀）

右の如く阿保機時代から遼國組織の主要分子として入り來つた漢人は景宗時代を契機として聖宗時代に入るや益々その重要性が認められ、遂に契丹人と對等の地位を得るに至つた。この經過は遼國の君主權が尙北族的な才能尊重的感情の殘存と大家族制末期的な宗族的意識との交錯の上に立つ宗室政治的なものより、支那的な制度化

された長子相續的絶對帝權へ進化する推移と相應するものである。斯くして遼室の帝權は景宗時代を経てその軌道に登つた。この間に與つて力あつたのは漢人知識階級の政界への進出と一般漢人の經濟的奉仕である。こゝに特に注目すべきは遼國に於ける商業の發達で、これが前述の如き君主權の強化に關係を有することは言ふまでもない。遼史卷六〇食貨志に

景宗、以舊錢不足於用、始鑄乾亨新錢、錢用流布

とある。太祖の頃天贄通寶を鑄たが、これは寧ろ國家的對面を備へるために鑄たものゝやうで、遼國に於いて眞に經濟界の需要を満たすために鑄錢したのは景宗の乾亨年間が始めてのやうである。以て當時が商業の進歩、貨幣經濟發達の一時期であつたことが窺はれる。この時代が遼の帝權の漢人によつて軌道に登らせられた時であることゝ思ひ併せると興味深き事實である。この點に關する論及は他日に譲る。

十四

以上によつて遼の君主權が北族的軍帥的なものより出發して北方民族に於いては曾て例を見ない支那的な帝權にまで發達した過程を考察し、これがこの國に於ける漢人の數とその重要性の増大とに關聯を有するものであることを見た。遼國組織への漢人の加入は漢的な文化や制度を採用せしめたのみならず國家の指導精神としても支那的なものを要求した。契丹八部の結合意識としての始祖崇拜に結び付いて居た木葉山の信仰は、漢人の力も與つて諸部の大人が誘殺されその名族も次第に遼室の制壓下に立たしめられんとした頃から、支那的な天神地祇の信仰を主調とするに至つた。更にこの信仰には、太宗が燕雲十六州をその領土とし俄かに多數の漢人を支配し

進んで晉を援けて唐を滅した頃から、佛教的な白衣觀音の信仰が加味され、太宗の遠征がこの觀音の命として附會されるに至つた。既に遼國に於ける漢人の間に行はれて居た佛教信仰は次第に遼室にも採用されざるを得なくなつたことが想像されよう。阿保機は天神地祇崇拜の他に、その初には一旦破棄せんとした契丹八部の同祖傳説を變形して遼室の始祖傳説としたが、これのみでは既に多數の漢人を包含した遼國君主權の支持原理社會統制の精神としては不十分となつた。こゝに於いて遼室の採用したのが儒教の他に佛教であつたのである。

更に注意すべきは遼室の始祖傳説の變質である。北族的な民主的意識を主調とする契丹八部の同源傳説や英雄崇拜的な阿保機の漢城物語は、遼室君主權の宗室政治的色採が消失して帝權が支那的な組織的絶對的なものとなつた聖宗時代に於いては既に支持的原理としてはその意義を失つた。こゝに於いて新に支那的な禪讓精神に基いた長子相續制的な所謂遙輦氏傳説が採用された。その成立は漢人の擡頭に隨つて漢的な文化や制度が著しく進出した統和中期頃のことであらう。初漢人統治の爲めに採用された漢的文化や制度は次第に契丹人統治の上にも及ぶに至つた。燕雲十六州を領有した會同元年には契丹固有の官名が漢風の稱呼に變改されたが漢文化進出の傾向はその後も次第に進展して若城久次郎氏も指摘されて居る如く統和十二年には契丹人を斷ずるにも重罪には漢律を用ひられるに至つた。これは契丹人一般の漢化を意味すると共に遼の國家權力の發動が漢文化的意識に色づけられ來つた標示ではなからうか。統和九年遼室の歴史が室昉・邢抱朴等の漢人のみによつて實録の形で編纂されたのもこの傾向の表れであらう。斯くの如き趨勢の中に漢的精神に基いた遙輦氏傳説が成立したと見ること不都合ではなからう。

考へ來れば遼室君主權の發達は一面その漢化の歴史であり、その發展は單に自然的內的のみではなく漢人的外

的契機に因るところも多しと見ねばならぬ。斯くの如き君主權の發達はその過程に於いて相違はあつても、この後滿洲に勃興した金や清にも見られる現象である。然し蒙古に於いてはその趣を異にして居る。

由來北方民族は、その勃興の當初に於いては、その口數も少く文化も低く物資少き上に、自然物經濟を主として居た。さればその發展には異種族殊に先進種族を人的に文化的に包含すること、又非合法的或は合法的にその經濟に依存する必要があつた。蒙古地方の民族は、その地理的條件から西方先進種族との關係が必至的となる。

既に松田壽男氏も述べられて居る如く、この地方の民族はその勃興に際し、固有の純粹牧畜經濟から商業經濟へ必然的に轉化する。支那と森林狩獵民とのみならず、これ等と西方諸國との間にも仲介商業關係を結ぶ。

斯くの如き西方との關係から、彼等は支那に對しては、自ら滿洲地方に於ける民族とはその關係を異にし、漢人及びその文化や經濟に直接依存する必要に迫られることが後い。從てこれが君主權發達に關與する過程も異つて居る。デングス汗の強大なる君主權が成立した後も、尙クリルタイ制の殘存や諸汗國の分封等の中に著しく北族的な宗室政治的性質が認められる。然しこの國に於いてはこの時期を經過するに諸汗國の分裂といふ大なる犠牲を拂はねばならなかつた。この現象は漢人やその文化と經濟が重要な要素として加擔しなかつたためではあるまいか。而してクリルタイ制を破棄して元の帝位を軌道に登らせることを得たクビライは矢張り漢地をその勢力の基據としたものゝやうである。斯く考へ來つて遼の景宗より聖宗時代に於ける絶對君主權成立の過程を見る時漢人漢文化やその經濟的奉仕力の貢獻の大であつたことを思はせられる。

斯くの如くして成立した君主權は絶大なる統制力を有し、經濟力もこれに追隨して未だその自由なる姿に於いて自然的威力を發揮するには至らなかつた。遼の中期以後になつて太平の續くと共に大量的武力行使の機會が少

くなり武力奉仕をその使命とする一般北族が次第に影を薄くした頃に至つては漢人やその文化の擡頭と共に經濟力の進出を見たのは疑ない。然しその經濟力も政治的權力と結び付いて始めてその威力を發揮し得たことを注意せねばならぬ。商業や手工業の發達に伴つて府治や縣治に於ける都市の發達を見たが當時の都市は漢人と宗室や官吏階級とを組成員とするもので、未だ政治的色彩が濃厚である。その都市は漢人を原任地よりその意志に反して引き裂き來つて土着せしめたものがその主體を成して居るから成立それ自身が既に遼室の武力を基礎とする政治的權力に由來して居る。遼代都市の政治都市的性質は右の事情によつても窺はれよう。これ等商業手工業を營む都市と、牧畜を主とする部族や農業を主とする漢人等地方民衆との間には所謂經濟的相刻の存したことは想像される。遼代末期に於いて漢人貧窮救濟の他に、部族人の窮乏やその救濟賑恤の記載の見えるのは多少右の如き事情に基いて居るのかも知れぬ。然し當時は未だ遼室君主權に據る政治的權力に近づいて居るものが主として經濟力の享有者で都市の經濟力も亦この政治的權力を背景として動いて居たのではないかと思はれる。

當時の階層關係も大體に於いて君主的政治權力を利用し得るものが上層富裕階級であり、下層階級は政權に遠ざかつた地方部族及び漢人であつた。斯くの如き關係に於いて封建的色彩を有する官吏的貴族階級の成立が見られたのである。されば當時の階級別は渤海以前の國家に見るが如き征服者と被征服者との種族別を主調とするものではないと共に、近世に於けるが如く經濟的性質の顯著なものでもなく、そこには政治的身分的色彩が濃厚に認められる。

然し遼國建設の原動力となつたものは征服者なる契丹族を主とする北族の素朴な生活力とその政治的天賦であつたことを忘れてはならぬ。この北族と被征服者なる漢族との間の民族的反感は決して解消したのではなく遼代

を通じてこれが存在したことを認めねばならぬ。殊に地方部族人や漢人に於いてはこれが多かつたことが想像されよう。又上層階級に於いても兩者の親密關係は打算と利益感情の上に立つ相互依存關係に基くものゝやうである。これ等のことに就いての卑見の發表はこれを他の機會に譲る。

〔補註〕

① 遼史卷七四康默記傳に一切蕃漢相涉事、屬默記折衷之、悉合上意、時諸部新附、文法未備、默記推析律意、論決重輕、不差毫釐、羅禁網者、人人自以爲不冤。とある。

② これ等の點に關しては津田博士の「遼の制度の二重體系」に基礎的研究があり、田村實造氏も東洋歴史辭典の「リョー」の部に興味深く叙述されて居る。又頭下州の性質と語義に就いては阿部健夫氏がその傑作「元代投下の語原考」東洋史研究三ノ六、に詳論されて居る。

③ 遼の制度の二重體系、滿鮮地理歴史研究報告第五、二二六—二四〇。

④ 景宗保寧三年北院樞密使耶律賢適が西北路招討使となつてより、聖宗統和三四年頃耶律斜軫が北院樞密使となるまで室防が北院樞密使兼北府宰相であつたやうである。

⑤ この穆宗應歷年間の鐘院の廢止を聖宗本紀統和十三年の條に詔諸道民戶、應曆以來脅從、爲部曲者、仍籍州縣とある記事と思ひ併せるとこの時代一般漢人が幾分迫害されたとも見られる。

⑥ 遼代に於ける漢人と刑法に關する一考察、滿蒙史論叢第一、參照。

⑦ 蒙古遊牧民とその歴史的役割、蒙古學第一冊所載。

本論考の作成に當り、恩師羽田亨博士を初め、京大史學科諸先生の御指導、及び小川茂樹、水野清一、森鹿三、宇都宮清吉等先輩諸氏の御助言に負ふところが非常に多かつた。末筆ながらこゝに附記して感謝の意を表す。